

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第174次)

2012年4月2日より、藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しています。6月末までの状況は前号で報告しましたので、以下では7月以降9月末までの概況をのべてみたいと思います。

本調査区の総面積は1,850㎡あり、その全面に^{れき}礫敷の広場を検出しました。7月以降は調査区の南3分の1ほどの部分の礫敷を除去し、下層の状況を調査しました。

礫敷の下には、朝庭部分を造営する際に大規模な整地をしています。整地は旧地形をならす目的の第一次整地、朝庭の本格的な整備にともなう第二次整地、礫敷広場を整備する直前に施した最終整地です。

第二次整地土を段階的に掘り下げていくと、掘立柱建物、柱列、溝、土坑等が検出されました。掘立柱建物は調査区の西南部分に集中し、昨年^{れき}の第169次調査で検出した建物と近接しています。調査区の東南部分は建物が希薄で南北方向の柱列が数条みわかりました。そのほか、直径が2.6m、深さも1mをこえる大きな土坑があり、中からは朝堂等に使用された軒瓦が出土しました。

これらの遺構のほとんどは第二次整地土にともなうもので、藤原宮造営期の遺構と考えられます。

また、調査区の北半分の礫敷を一部除去し調査を進めたところ、従来の調査で確認されていた沼状遺構の南端を検出しました。これによって、沼状遺構の規模は南北50mほどと判明しました。ただし、この遺構の性格は未だ不明といわざるを得ません。

発掘調査は10月以降も継続します。今後の展開にご期待ください。(都城発掘調査部 今井 晃樹)



下層遺構の検出状況(北西から)

檜隈寺の調査(飛鳥藤原第176次)

昨年度おこなった檜隈寺の調査(第172次調査)では、檜隈寺が位置する丘陵の頂部と南東麓に調査区を設け、前者では^{どうかん}幢竿支柱の可能性が高い巨大な柱穴を、後者では^{すぼりみぞ}素掘溝を確認していました。素掘溝は、出土した遺物から見て古代の溝と考えられました。今年度は、この素掘溝の延長が想定される部分を調査しました。

素掘溝は今回の調査でも検出され、南から北へ流れていたようです。素掘溝は、幅2.0m前後、深さ85cm以上という立派な規模であることが確認できました。水が流れた痕跡はあきらかではありませんが、増水時に水を丘陵裾側へ流すとみられる枝状に分かれる溝も確認できました。

素掘溝から出土した遺物には、6世紀末頃の土器に加えて、瓦片もありました。瓦片の多くには格子叩きと呼ばれる痕跡が確認でき、飛鳥で出土する瓦の中でも古い特徴を示しています。史跡に指定され、現地で見ることができる檜隈寺の遺構は、7世紀末頃の築造とされているので、この瓦片と素掘溝は、その前身になるとかねてより指摘されている寺院に関係しそうです。

檜隈寺の過去の調査では、同じ時期に推定される遺構や遺物がいくつか見つかり、今回の成果も加え、前身寺院の手掛かりが徐々に増えてきました。今回の素掘溝は、その寺域を示す溝の可能性もあり、後世の耕作で北への続きは残っていないようですが、南側は望みがあります。謎に包まれた檜隈寺前身寺院、その手掛かりを将来の調査に期待できそうです。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



素掘溝(南東から)